

作品「舞姫」が私たちに教えていること

私は、最初「舞姫」を読んだとき、豊太郎はこの作品によってとても苦しめられていると思った。そこで、このような設定にする理由、つまり私たちに何を教えていようとしているのかを考えてみたいと思いこのテーマを設定した。

そして、鷗外はこの作品によって私たちに自我の確立の難しさを伝えていていると考えた。

社会が大きく変動した明治時代では、自分の能力によって上の階級へのぼることが可能になった。そこで、人々が必要としたものは、勤勉、忍耐、新時代の学問知識であった。また、そうした修養によって身を立てることは人間として価値あることとされていた。本文で豊太郎は忍耐強く勉学に努め、世の覚えは非常によい。このことから、豊太郎がいかに強く明治時代の影響を受けていたかがわかる。また、手記の始めやドイツへ行く前に書いて書いているときには豊太郎は自分自身はこうだということが書かれていない。すなわち、この時代に生きる豊太郎は名誉や学識にとらわれ自我ということを考える慣習さえなかったのだからこのような時代背景の中ではさらに自我を追求することが難しいと言える。

しかし、ドイツへ行き、今までとは違う自由な風に当たり豊太郎は自我に目覚める。私は、豊太郎はその自我の目覚めには強い期待をもっていたと考える。なぜなら、これまでの自分はただ受動的で機械的人物であったことに気づき「昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。」とあるように以前の自分を否定するようになるからだ。本文「我が心はかの合歓という木の葉に似て一中略一ただ外物を恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。」と自分とはこんな人間だと長々と書いているが、ただ自分は弱い人間だということを繰り返し書いているだけである。これより、これまでの自分に嫌気を差していることを示し、こんな自分の評価をしているのならば、誰であれ戻りたくない、本当の自分というものに期待するであろう。ここでうまく豊太郎が自我を確立することができたならば私たちへの教訓としては何もなくなってしまう。

この後、豊太郎はエリスに会い恋愛もする。当時の時代背景から恋愛を考えると豊太郎はかなり自由な生活を送っていたことがわかる。しかし、そんな自由な生活をしているときに立身出世の影響を強く受けた相沢がドイツへやってくる。豊太郎とは正反対の生き方の人物だ。良い仕事もなく生活が苦しい豊太郎は相沢から出世の話をされると、自我に目覚めたはずであるのに以前の自分が支配するようになる。これには、激しい葛藤があったに違いない。「友に対して否と答へぬが常なり。」とある一方、「ああ、なんらの特操なき心ぞ、『承りはべり。』と答へるは。」とあるがこれは豊太郎の意志の弱さによる言動だ。そして、愛するエリスがいて自由に生きたいはずなのに、自分の意志が伝えられず自我を求め続けることができず挫折してしまう自分との葛藤を示している。また、豊太郎は「学問は荒みぬ。」と二度言っている。自ら自由な生活を求めて生きているのだから学問がどうかいうことはあまり考えることではないはずだ。しかし、学問について述べているということは以前の自分から抜け切れていなかったことを示している。つまり、自由な生活をしていながらも自我というものと格闘していたことが分かる。このように、自分がこうしたいのにできないもどかしさを感じることは今の私たちにもあることではないだろうか。豊太郎をとりまく人間関係、恋愛の中での自我との葛藤は現代の私たちに通ずるものがある。

以上より、作品「舞姫」は私たちに自我は簡単に見出せず、自我の確立の難しさを教えていていると考える。鷗外は、豊太郎という人物を通して私たちへの教訓としたのだ。そして、私はさまざまな問題の中で自分との葛藤を繰り返し、ひとつの挫折で落胆しないことが大切だと思った。

参考資料 便覧